



「東日本大震災と原発事故からの復興と課題～震災から12年を迎えて～」

大熊町職員労働組合 執行委員長 愛場 学

自己紹介

生まれ：1979年12月 福島県大熊町

仕事歴：1998年 4月 大熊町役場入職 産業課 農林土木関係
住民課 国保年金関係
(震災による避難後) 税務課 賦課関係
【派遣】福島県後期高齢者広域連合
健康介護課 健康づくり関係
企画調整課 東電賠償、まちづくり関係
【出向】(一社)おおくままちづくり公社
保健福祉課 子育て支援、福祉関係
産業課 産業交流、農政振興関係
入庁26年目 (現在) 税務課 課長補佐兼徴収係長

組合歴：1998年 4月 大熊町職員労働組合加入
県本部青年部事務局長
県本部中央執行委員
(現在) 大熊町職員労働組合執行委員長

今回の講演の内容

- 第1部…震災と原発事故による町の影響と変化
- 第2部…復興に向けた取り組みと課題
- 第3部…労働組合の重要性と意義



震災と原発事故による町の影響と変化

西へ避難してください！

震災前の大熊町～自然豊かな住み良い町～

大熊町は、面積の約6割を森林が占める自然豊かな町です。西側は阿武隈高地の一端にあたり、東側は太平洋に面します。町民は山、川、海の恵みとともに生活してきました。



■ 人口11,505人
(2011年3月11
時点)

■ 世帯数4,235世帯
(2011年3月11
時点)

■ 面積78.7 km²
(※山手線の内側：63
km²)

震災前の大熊町～フルーツの香り漂うロマンの里おおくま

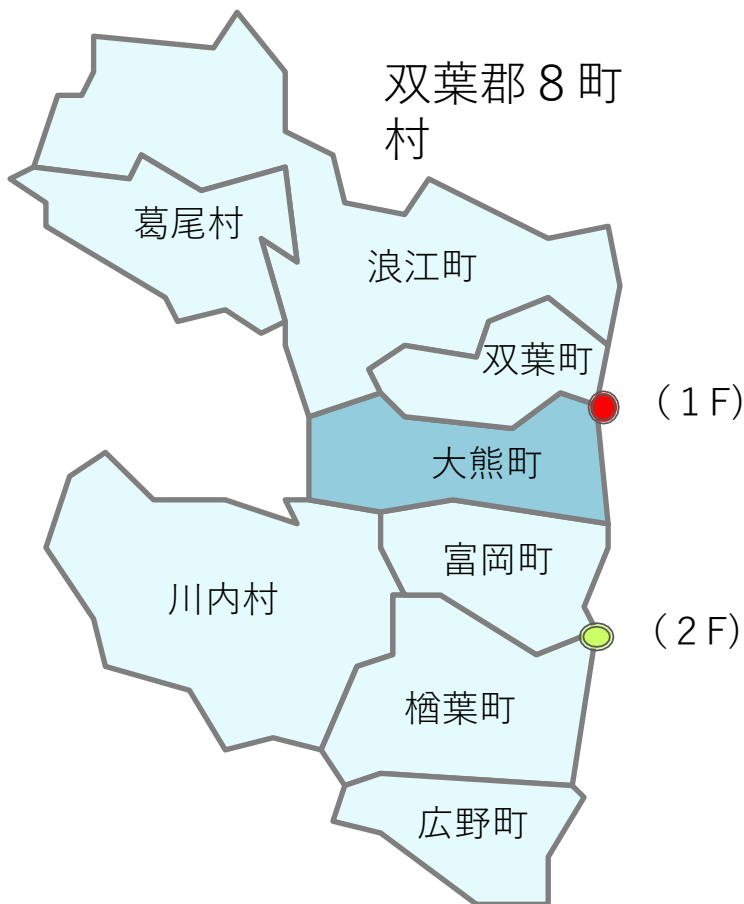
温暖な気候を生かしたナシやキウイ、熊川を上るサケ、原発の温排水を利

用した養殖レニョカビ、多くの特産品が「ふるさと」の宝庫にまわって



大熊町と東京電力福島第一原子力発電所

東京電力福島第一原子力発電所は1971年の営業運転開始より首都圏にエネルギーを送り続けてきました。1号機の着工を境に町の人口は増加傾向へ。原子力発電所は町の雇用産業の中心でもありました。



1967年	東京電力福島第一原発1号機着工
1971年	1号機営業運転開始
1974年	2号機 //
1976年	3号機 //
1978年	4号機 //

※5、6号機は双葉町に立地

東日本大震災による被害



町内では震度6強を観測し、地震に伴う津波により沿岸部2km²が浸水しました。

■ 人的被害：死者143名（直接死12名、注：避難に伴う震災関連死は今も増え続けている震災関連死131名）

■ 建物被害：津波による全壊家屋48棟
地震による全壊287棟、大規模半壊666棟
半壊1,610棟、一部損壊27棟

混乱の中での災害対応

役場庁舎も各所で書棚が倒れるなど、大変な状況でした。本来災害対策

本部を設置する正庁も確定申告期間中で使用できなかったため、2階ロビー



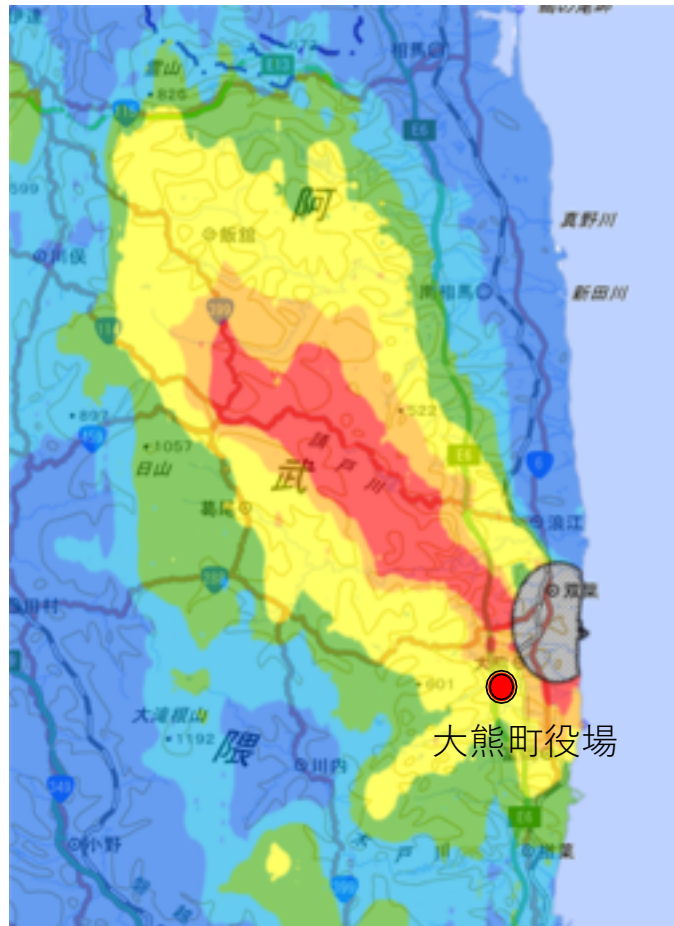
地震の影響で
損壊した役場
庁舎内



災害対応を指示する渡辺利綱前町長
(大熊町震災記録誌より)

福島第一原子力発電所の事故による被害

津波は福島第一原子力発電所の重大な事故を引き起こしました。放射性物質の漏洩により全町民が隣接する自治体などに避難しました。



放射線量等分布マップ拡大サイト

(2011年4月29日時点)

3月11日午後9時25分

1 F半径3 km圏内
避難指示

3月12日午前5時44分

10 km圏内避難指示

全町避難開始

同午後3時36分

1 F 1号機水素爆発

同午後6時25分

20 km圏内避難指示



避難指示発令による全町避難開始

3月12日の早朝、10km圏内に避難指示が出され、政府が用意したバスや
自家用車などで避難しました。「とにかく西へ…」それが職員に指



バスに乗り込む町民
(大熊町震災記録誌より)



不安な中バスが来るのを待ち続ける町民
(大熊町震災記録誌より)

一次避難先での避難所対応

全町避難により、大熊町から西に約30kmの田村市総合体育館に災害対策本部

本部が移され、避難所運営が始まりました。想定より広範囲に町民が避難した

り、対応にあたりまし



一次避難先での支援物資の搬入や放射線検査等の様子
(大熊町震災記録誌より)

災害対策本部で業務にあたる職員
(大熊町震災記録誌より)

二次避難先での行政機能の再開

一次避難から約3週間が経過した4月5日、放射線の影響がなく、行政機能の再開と町民の安全な避難生活の確保のため、大熊町から西へ約100kmの



大熊町会津若松出張所開所と仮設住宅建設の様子
(大熊町震災記録誌より)



長机を並べて業務にあたる職員

震災と原発事故の影響による町内の様子

震災翌朝から予定されていた行方不明者の捜索活動は避難指示により中止され、町沿岸部の捜索が再開されたのは2011年5月でした。無人の町では残された家畜やペットが歩き回り、町内は荒廃していき

震災から2か月後に始まった行方不明者捜索



町内を徘徊する犬たち



町内の津波被災地区で行われた慰霊祭 (2011年7月)



ツタで覆われた線路

町内の立入規制と一時帰宅

町内のほとんどが帰還困難区域となり、立入制限のバリケードが設置された

ため、自由に立ち入る事が出来ませんでした。そのため、町内への一時帰宅



タイベックスーツを着て一時帰宅の準備をする町民

(大熊町震災記録誌より)

立入を規制するバリケードが帰還困難区域の境界の道路等全てに設置された

広域避難による行政機能の分散設置

会津若松市で行政機能を再開しましたが、県内外の広域に町民が避難した

ため、避難の長期化を見越して、避難者が最も多かったいわき市をはじめ

・2011年4月5日
県内各所に行政機能を
大熊町役場

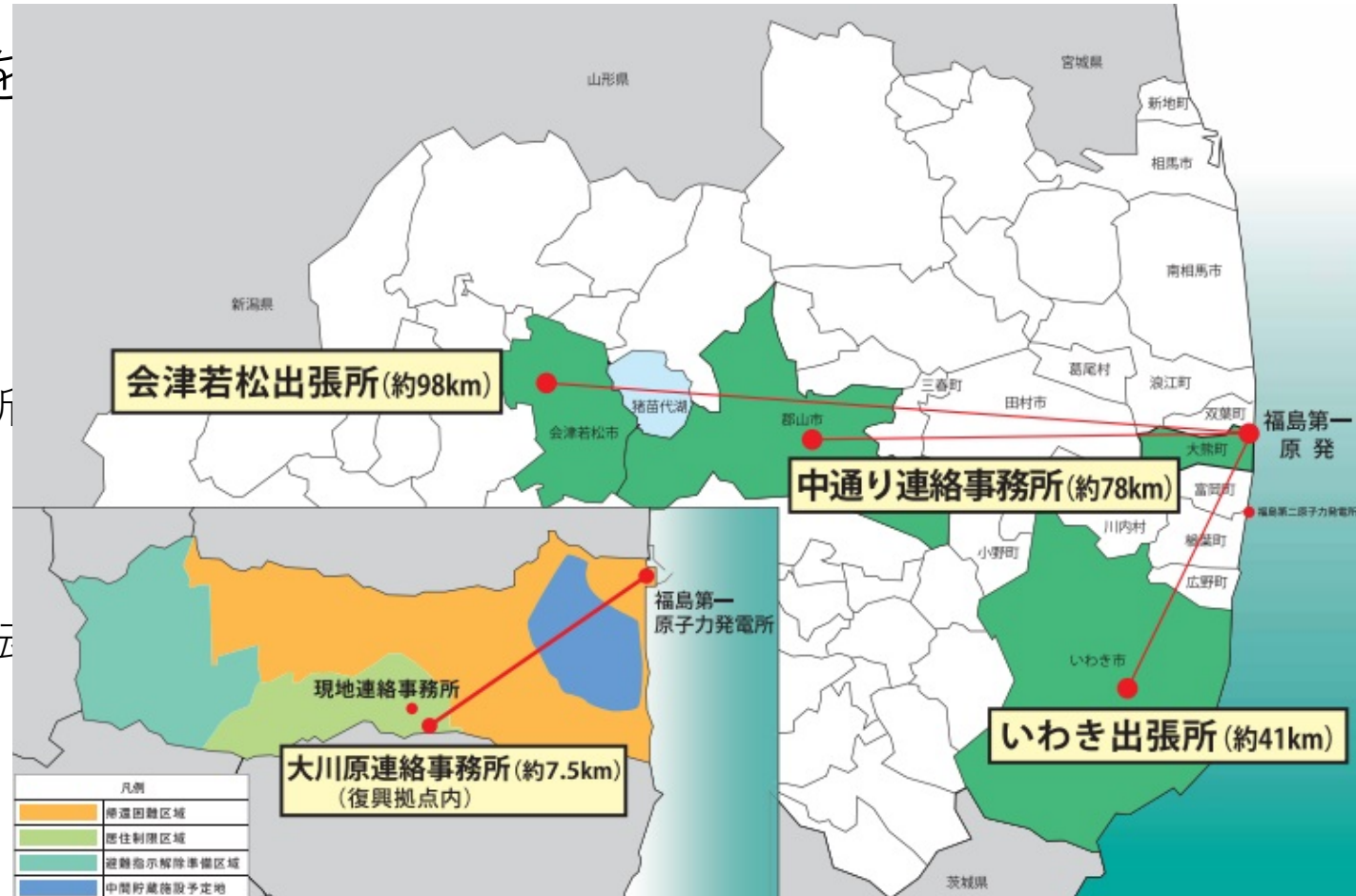
会津若松出張所開所

・2011年10月

いわき連絡事務所開所
(のちに出張所に改編) 開所

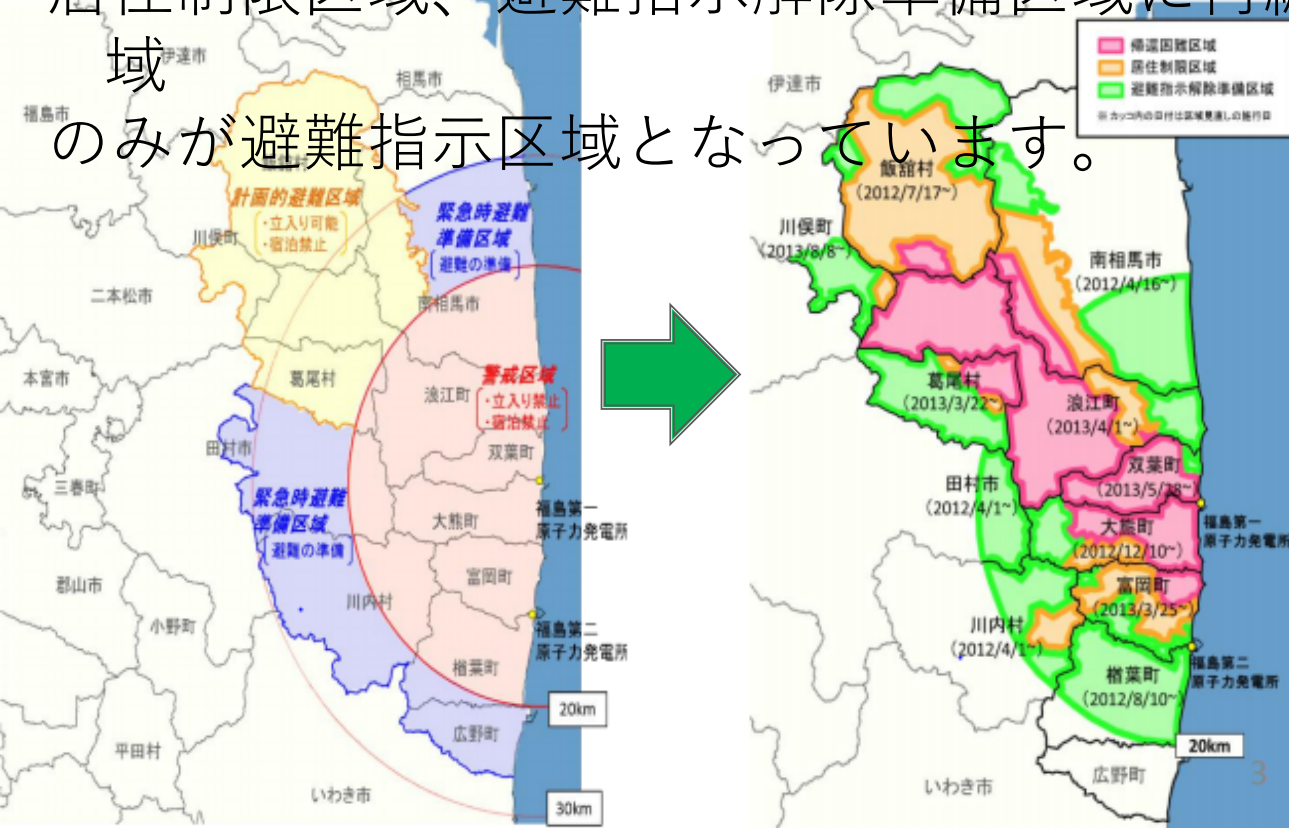
・2012年10月

中通り連絡事務所開所
(二本松市から郡山市に移転)



避難区域の変遷

2011年4月、国は福島第一原子力発電所の半径20km圏内を警戒区域に設定し、立ち入りを禁止しました。その後、放射線量に応じて帰還困難区域、居住制限区域、避難指示解除準備区域に再編され、現在は帰還困難区域のみが避難指示区域となっています。



2011年4月22日時点

2013年8月7日時点

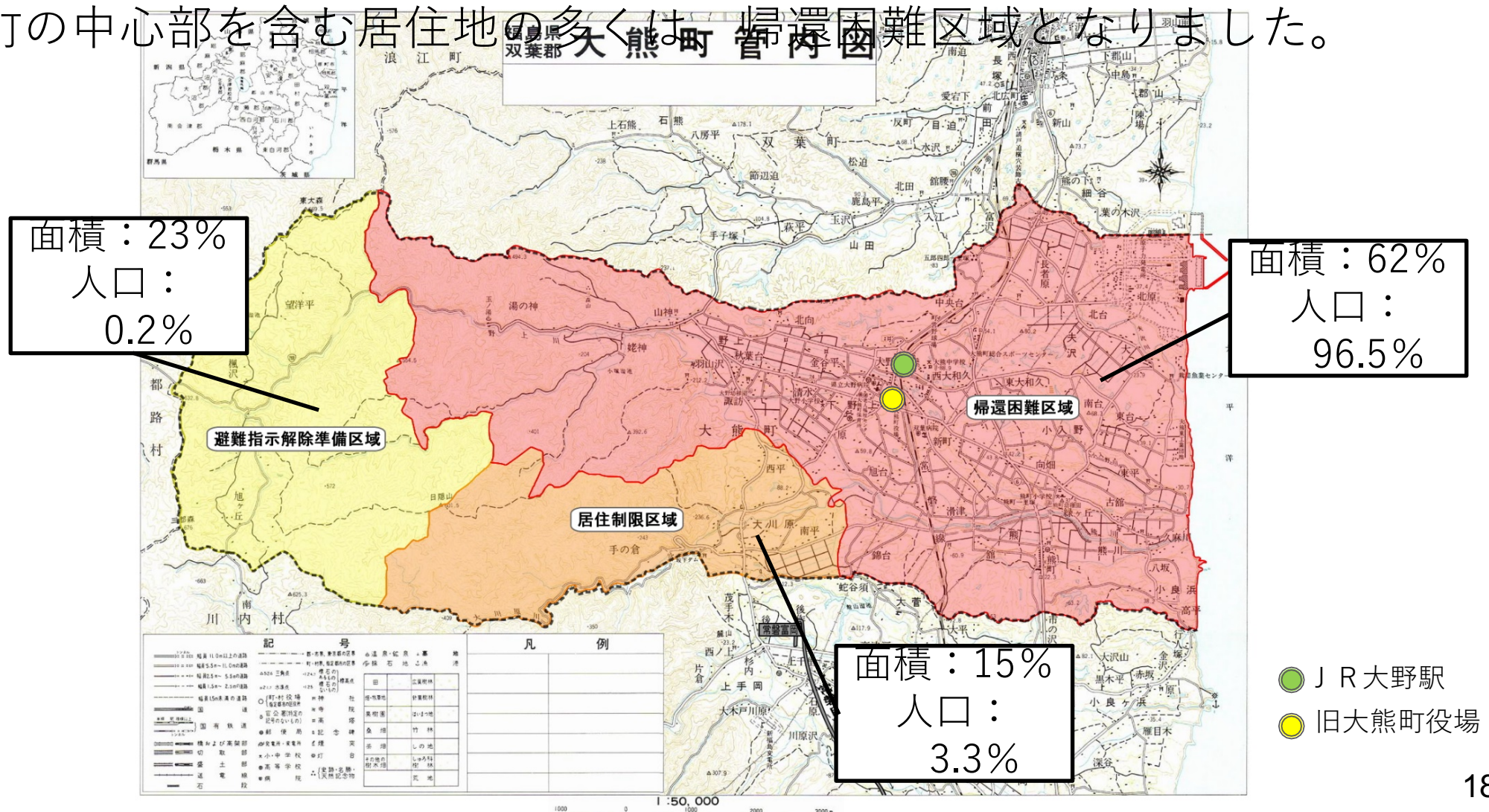


2019年4月10日時点

大熊町内の避難指示区域

2012年12月10日、大熊町は全域が3つの避難指示区域に分類されました。

町の中心部を含む居住地の多くは、帰還困難区域となりました。

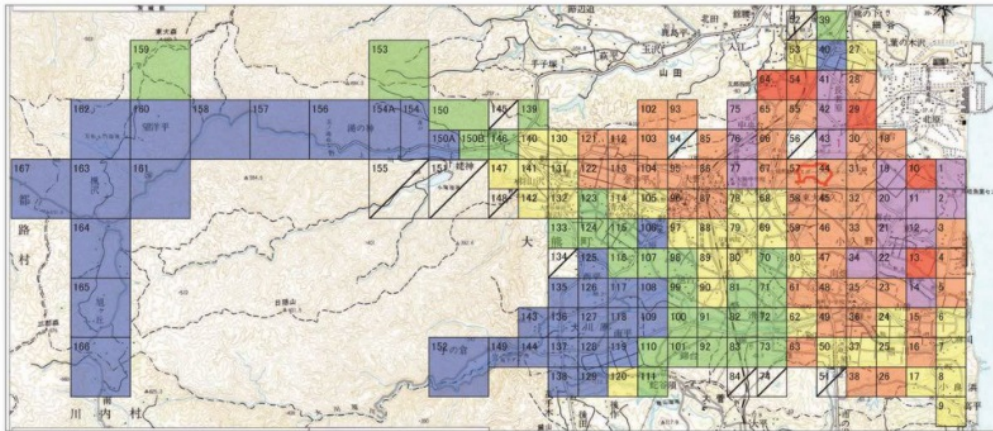


復興に向けた取り組みと課題

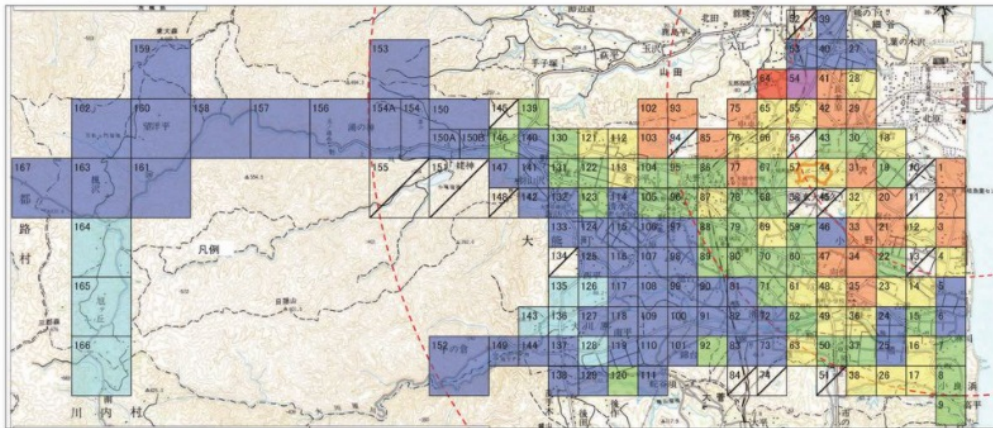
大熊町内の空間放射線量の低減と除染の実施

空間放射線量は町の西側で比較的低く、福島第一原子力発電所の周辺で高い傾向があります。居住制限区域と避難指示解除準備区域の除染が進められ、徐々に放射線量は低減していきました。

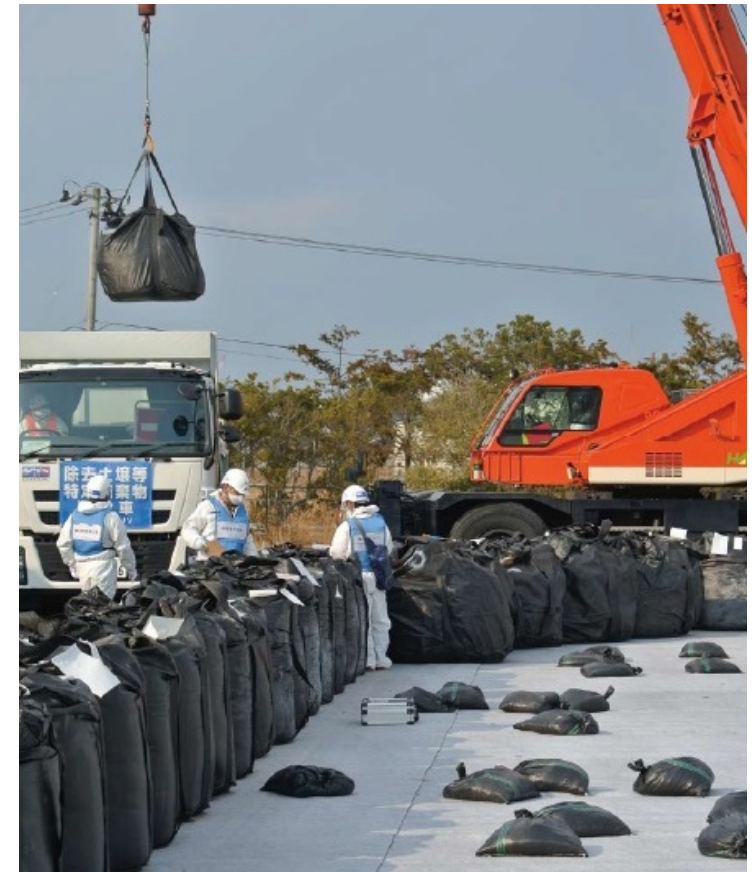
2016（平成28）年9月測定結果



2020（令和2）年9月測定結果



凡例 ■ 0.23未満 ■ 0.23～1未満 ■ 1～2未満 ■ 2～3.8未満 ■ 3.8～9.6未満 ■ 9.6～15未満 ■ 15以上
(単位：毎時 μ Sv)



除染土のに入ったフレコンパックを運ぶ様子

(大熊町震災記録誌より)

念願の避難指示解除（8年越しの帰町）

2019年4月、避難指示解除準備区域及び居住制限区域の避難指示が

解除されました。復興拠点である大川原地区には役場新庁舎が建てら

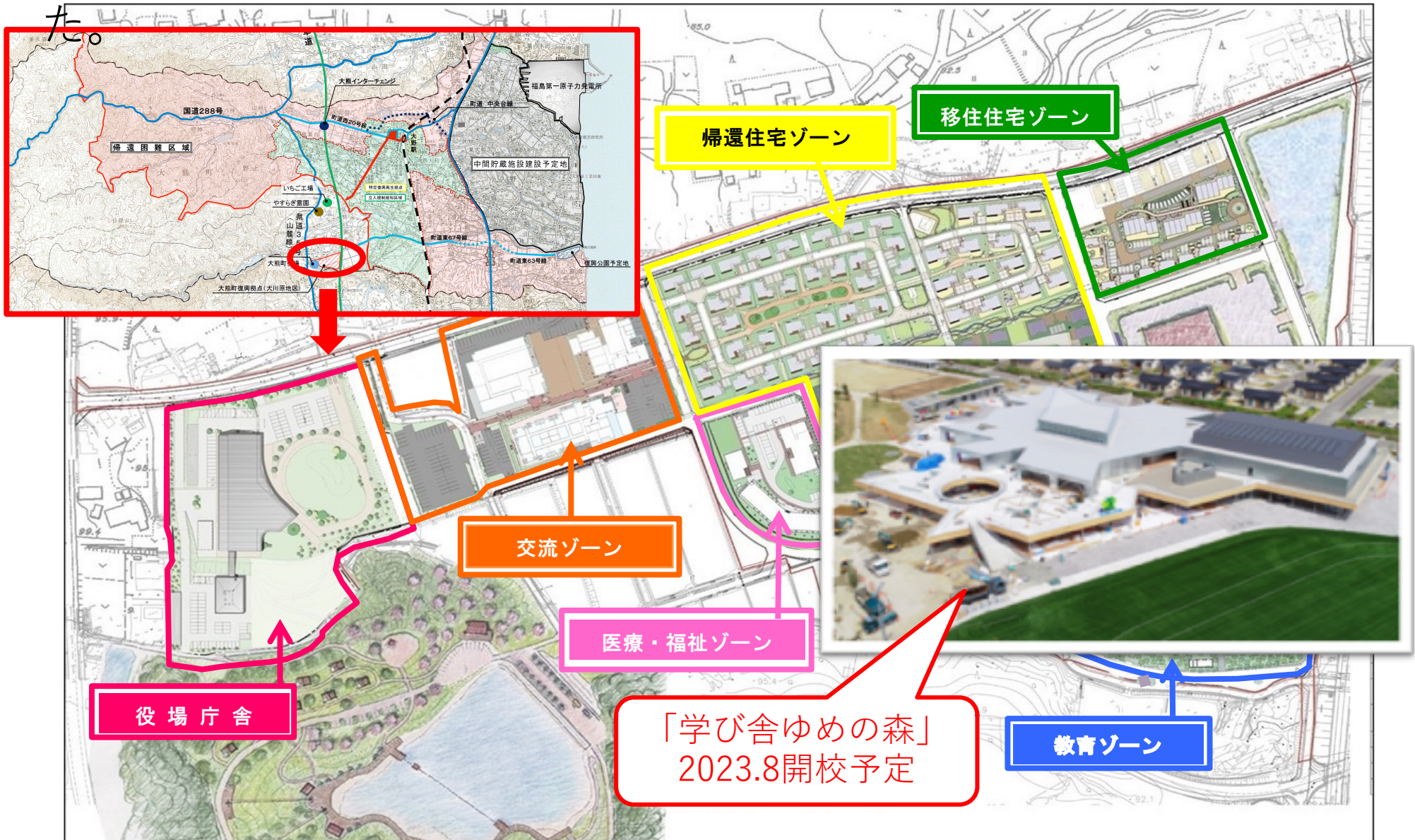


自然と同調したデザインの役場新庁舎

開庁式でテープカットする安倍首相（当時）と渡辺前町長

大熊町復興拠点(大川原地区)

町の南部を復興拠点と位置づけ、コンパクトな町づくりが始まりました。



現在の大熊町の避難指示区域の状況

帰還困難区域の一部が特定復興再生拠点として国の除染が進められ、2022年6月30日に、11年の歳月を経て駅前中心地の避難指示が解除されま



復興への取り組み～新たな特産品の開発～

2019年4月、イチゴの栽培施設が操業開始。町がイチゴ栽培に取り組むのは初めてですが、震災前に掲げていた「フルーツの里」の復活に向け、新たな特産品として育てていきます。



↑品種「すずあかね」

■面積：敷地面積4.8ヘクタール、
施設面積2.8ヘクタール（育苗、選果施設等
含む）

■運営：「株式会社ネクサスファームおおくま」（町
100%出資）

2019年8月からは出荷が始まり、提携する販売
会社を
通じて主に加工用として使用されています。

復興への取り組み～特産品復活をめざして～

震災前に町の特産品だったキウイフルーツの栽培を通じて、様々な人たちが交流することを目的に発足した「キウイ再生クラブ」。町職員や地元企業



復興へ取り組み～夏の風物詩 盆踊りの復活～

震災前の夏の風物詩であった盆踊り。その盆踊りを通じて人々の交流を図る

ことを目的に結成された「大熊平馬会」。再開した町の夏祭りの際の



大熊平馬会メンバー

2022.9に開催された夏祭りの様子（町HPより）

復興への取り組み～希望の灯りの継承～

阪神淡路大震災から復興した兵庫県神戸市に灯されている希望の灯り。
東日本大震災と原発事故で被害を受けた大熊町が、神戸市のような復興を成し遂げられる

よう、復興への取り組みを進めていこうと職員有志で設立された「ルミナリエプロジェクト」。

震災から10年の2021年3月1日に神戸市を訪れ、NPO法人「阪神淡路大震災1.17希望の灯り」



神戸市での希望の灯りの分灯式



復興の花火が夜空を照らした



イベントに花を添えたスカイラン



1.17に実施している追悼の祈り



大熊町での希望の灯りの点灯式



新たな町づくり～ゼロカーボン宣言～

人にやさしく、地球にもやさしいまちづくり ～ゼロカーボンによる復興の推進～

理念

- ・原発事故により全町避難を経験した町だからこそ、気候変動という世界共通の課題解決に取り組む。
- ・将来大熊が、原発事故の町ではなく先進的なゼロカーボントウンとして、私たちの子ども・孫たちが誇りをもって語れるまちづくりを進める。

施策

- 創る：再エネをつくる（太陽光、風力、小水力）
- 巡る：地域内循環システムの構築（スマートコミュニティ、RE100産業団地、地域新電力）
- 贈る：持続可能な大熊を次世代へ贈る（自然再生、インキュベーション、環境教育）

何をするにも人。人を育てる。

創
巡
贈
る
る
る
大熊



町のマスコット「まあちゃん」

2050年 ゼロカーボン
二酸化炭素実質排出ゼロ

町内全域の復興 帰町人口 4000人

駅前スマートコミュニティ・RE100産業団地

2022年 特定復興再生拠点全域 避難指示解除

2021年9月 条例制定、新会社（大熊るるるん電力）設立

2020年2月9日 大熊町 2050ゼロカーボン宣言

1970年 福島第一原発 稼働開始

2019年 帰町開始

2011年 東日本大震災・全町避難



大熊町の震災と復興の記録～震災記録誌～

2017年3月に、東日本大震災と原発事故による町の被災状況と、震災から6年間の復興の記録や町民の証言等をまとめた「大熊町震災記録誌」を発刊しました。



HPのQRコード

復興への課題～住民の帰町～

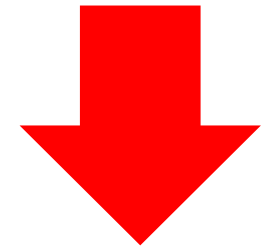
避難生活の長期化により避難先での生活が定着したことと、住民の多くが住んでいた中心市街地が帰還困難区域となっていたことから、住民の帰町は進んでいない状況です。



大川原地区内に整備された公営住宅

(震災前の人口)

11,505人



(2023年4月1日現在)

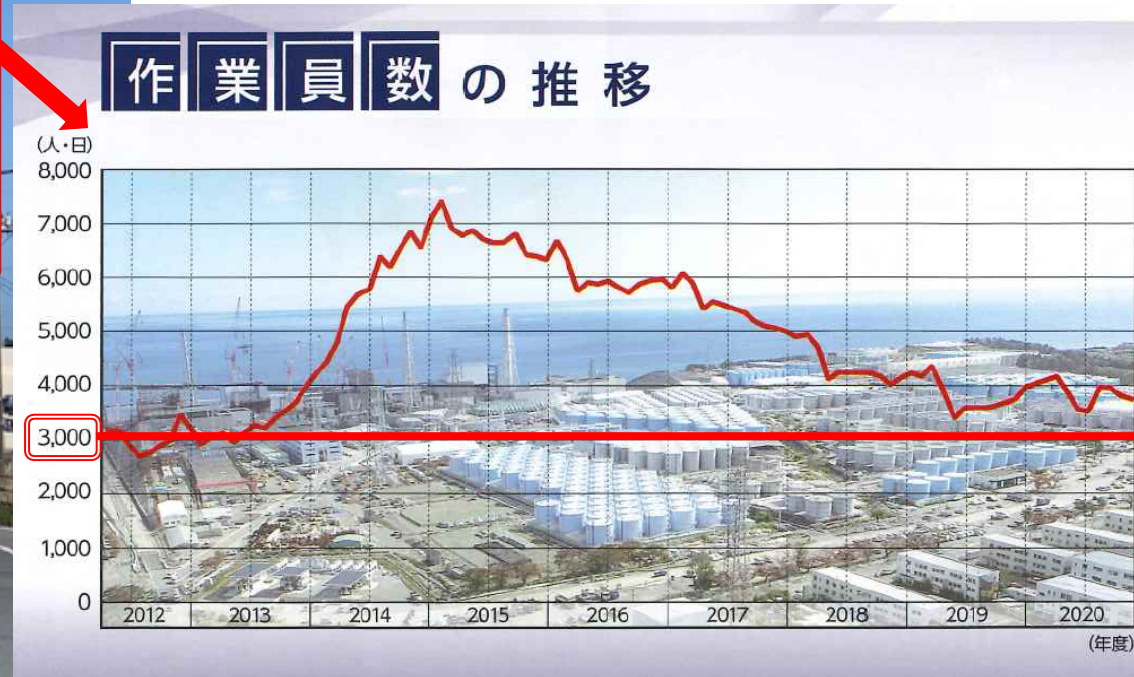
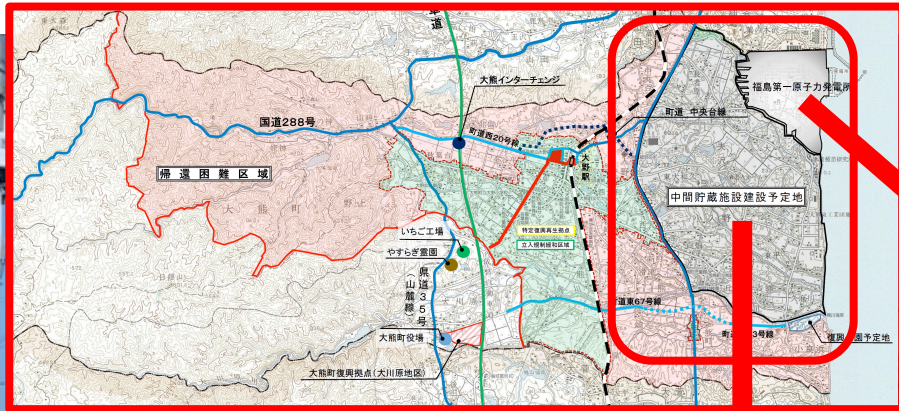
487人

【震災前の4.2%】

※震災後転入含む

復興への課題～中間貯蔵施設と原発廃炉～

中間貯蔵施設は、**県内の除染で出た汚染土などを30年間保管**する施設です。また、東京電力福島第一原子力発電所の廃炉作業には、**連日3000人以上の作業員**が従事しており、**技術開発を前提に40年以上（廃炉完了予定2050年）**を要す



中間貯蔵施設に汚染廃棄物を運搬するダンプの車列

【機関誌H a i r o M i c h i (はいろみち)より抜粋】

復興への課題～震災後の退職職員の増加～

早期退職者は2012年度が最も多かったが、近年また早期退職者が増えてきています。



(大熊町役場の正規職員数約130名【2023年4月時点】) ～組合集計～ 32

災害はいつでも起こりうる～備えと対策を～

2021年2月13日に震度5強、2022年3月16日に震度6弱と、立て続けに大きな地震が発生。発生時間が深夜という事もあり、職員の参集と被災状況の確認に時間を要しました。

災害はいつ起こるか分かりません。常に意識を持って防災・減災の対策の徹底を



壊れたカウンターボード



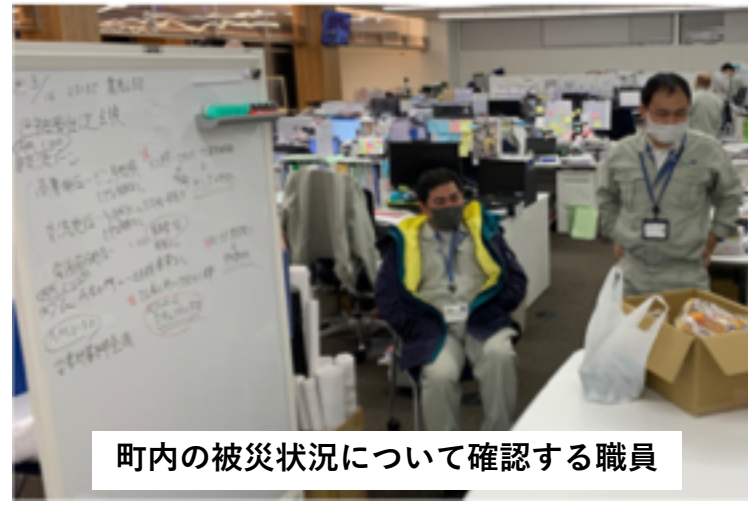
町民用飲料水を多目的ホールに設置



町民の安否確認のため朝を待つ職員



地元スーパーで散乱した飲食物



町内の被災状況について確認する職員



労働組合の重要性と意義

職員の避難時の苦悩

町民の集団避難に伴い、
職員が避難所へ同行。



混乱により避難した職員もいた



家族は避難させた。
しかし、自分は仕事のため
残らなければ・・・



職員も被災者

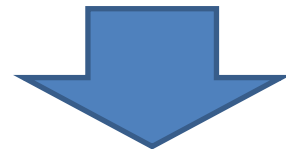


大熊町職員労働組合の取り組み①

職員が疲弊していく中、大熊町職労は職場環境の改善を求めた。



休みを取得できる環境づくりと手当の強化を要望。
今後の財政不安による県内旅費撤廃の提案を阻止。



組合による団体交渉を繰り返し行い、手当と権利を確保。

**組合は、働く組合員の思いを共有し、全力でサポートする組織。
先輩が相談に乗る。不安や悩みの解決のサポート。働きやすい職場環境をつくる。**

組合がなかったら・・・

一方的に労働環境や労働条件が決められてしまう。

大熊町職員労働組合の取り組み②

震災年度（2011年度）の取り組み

- 人員確保の取り組み
- 震災対応に係る勤務体制に対する取り組み
- 超過勤務手当支給に対する取り組み
- 職員の健康問題(メンタル含む)に対する取り組み

大熊町へ帰町した年度（2019年度）以降の取り組み

- 人員確保の取り組み → **社会人枠採用の強化**
- 賃上げの取り組み → **初任給含め在職者の一斉4号増額**
- 各種手当の取り組み → **特殊勤務手当の新設・拡充**
- 復興業務に係る勤務体制に対する取り組み
- 職員の健康問題(メンタルヘルス含む)に対する取り組み
- 福利厚生 of 改善への取り組み

全国の労働組合からの支援へ感謝の思い

震災発生から現在に至るまで、全国の労働組合の方々に人的支援や物的支援を

いただき、復興の後押しをしていただきました。これからも、感謝の気持ち



労働組合の学習と交流



野球大会で団結強化



メーデーで環境改善要求



フットサル大会でリフレッシュ



学習会で仕事の仕組みと権利を学ぶ



全国の仲間との交流

大熊町へのこれから思い

○ふるさとを取り戻すという強い思い

○もとの住民と新住民、若者による新たな町づくり

○これまでもこれからも支援への感謝の気持ち

○大熊町の今と未来を多くの方々に見
い



学生による町の発展のための取り組み～はちどりプロジェクト～

学生の視点で、大熊町に対する若者の深い理解と関係人口の創出、また発展のきっかけと

プロジェクトごとに立案した内容

優秀賞を受賞した企画は、
実現に向けて町がサポート
します



チームごとのプレゼンの様子



全国から集まった大学生が、本気で大熊町の未来を考えてくれました

学生による町の発展のための取り組み～農業インターン～

1週間町内に滞在しながら、いちご栽培施設の収穫作業等の手伝いをさせていただきました。

また、町内視察と町民や役場職員との意見交換を行い、最後はよりよい大熊町にするための
企画提案をしていた



学生による農業インターンの様子

学生による町の発展のための取り組み～大学生観光まちづくりコンテスト～

2022年、被災12市町村の被災した人たちと連携したまちづくりプランを大学生が考えるコン

テストにおいて、明治大学木寺ゼミ生が考えた、大熊町と浪江町を舞台にした1泊2日のプラン

「つなごりbe ～旅で祝おう2分の1成人～」



本選での発表の様子



明治大学/KIDERAゼミ DEAR IwaKi

「つなごりbe ～旅で祝おう2分の1成人～」

グランプリ受賞の様子（HPより）

夏に行ったフィールドワークの様子（自分も同行）

セミ生の皆さん、木寺先生、思い出をありがとうございました！



学生の皆様にお伺いします

大熊町は、全町避難を経て、ゼロからの町づくりを進めています。その町づくりには、学生など若者の力が絶対に必要です!

今後のまちづくりのため、あなたならどのような取り組みをしますか?



震災と原発事故から復興を成し遂げた町となるよう、これからも頑張ります！



(2023年6月の大川原復興拠点)

ご清聴ありがとうございました。